ある幸福

OCTOBER

築二百年は経とうかという寮の最上階には特別な部屋がある。上級六年生かつ当年の最も優秀な学生、つまり首席がその寮に誕生した時にのみ使われる部屋だ。ゆうゆう大人二十人は寛げる広々とした居間にはどっしりとした絨毯が敷かれ、煉瓦で四角く囲われた暖炉のマントルピースは樫だ。長年磨きこまれてまるで黒曜石のようにしっとりと輝いている。室内にある全ての家具はヴィクトリア調で統一され、ノスタルジックな様相を呈していてる。居間を中心にして、暖炉の向こう側にはこじんまりとしたキッチンと浴室、そのまた反対側は寝室だ。

先の大戦まではこの部屋に入った人間には、下級生の中から従者を選ぶ権利も与えられていたという。小姓の役目を果たす下級生が、洗顔のための水を準備し、朝食を運び、紅茶を淹れるのだ。制服は常に彼等の手によってアイロンを当てられ、靴も鏡のように磨かれる。全く貴族然とした生活であり、贅を尽くした部屋である。特権というものを効果的に知らしめる。寄宿舎という世俗から隔絶された世界の中の事ではあったが、この部屋とその主は英国の支配階級を具現化する舞台装置のようなものだった。特別な者は多勢の中のごく少数であり、その者達は他者より秀でるが故に破格の待遇を饗する権利がある。

あと十数年で二十一世紀を迎えるクイーンズベリでは既にそのような特権は撤廃されて久しいが、スミス寮の首席室はこの世紀末になって真の意味での主を迎えていた。サガ・エセルバート・シュローズベリ、公式にはチェトウィンド卿を名乗る年若い青年は、十三の年までガヴァネスによる教育を受け、今では絶滅の危機に瀕していると見なされている歴史的特権階級の血脈の凝縮だった。単身で公共の移動手段に頼った事も、買い物という行為も、彼はクイーンズベリで学業の徒となるまで経験した事がなかった。稀有の人である。その類稀なる人は、市井の同年代の学友に混じり、二年の学業を終える頃、生涯で一度の恋に落ちた。相手は彼の同級生であり、落ちた恋心は落着の地を見定められぬまま大きな煮鍋の中で掻き混ぜられた。そして、初恋の一歩を踏み出して二年の後、チェトウィンド卿の恋情は漸く辿り着く場所を見出した。長い煩悶の日々からの解放であり、一つの物事の終着であった。しかし、それは早春の幼い恋心の季節を終えたに過ぎず、時は新たな季節への扉を開き彼にその道程を促していた。

キィ、という古い蝶番の軋む音、絨毯の上をゆったりと歩く足音、陶器の立てる硬い音、それらが順繰りにサガの聴覚を刺激し、彼はうっすらと閉じていた目蓋を押し上げた。部屋の中は薄暗い。一体今は何時なのか。サガは時を確認しようとして体がずっしりと重い事に気付き、暫し息を止めて蘇った羞恥心をやり過ごした。昨晩、彼は恋人であり同級生のアイオロス・エインズワースと一週間ぶりに体を繋げたのだ。金曜の晩と土

曜の晩は一緒に過ごそう。アイオロスの提案は、隣室の監督生シュラ・コーツを巻き込んでのスケジュールで、模範生たるべき首席に許されるようなものではなかったが、結局サガはそれを断れなかった。

週日、アイオロスは毎朝サガの部屋を朝一番で訪ね、サガの身支度を手伝ったり、または眺めて楽しみながら食事に向かう前に口付ける。冷酷な絶縁状態を払拭した今、アイオロスは以前のようにサガと一緒に食事を取り、課外クラブであるクインズベリ交響楽団への道行きを共にする。そして、必ず就寝前にサガの部屋をまた訪ねて終日の挨拶代わりのキス。しかし、逆に言えばそれだけなのだ。

アイオロスは、公共の場ではきっぱりとサガへの深い愛情を隠して見せた。復縁した友人という役を完璧にこなしているのだ。サガは、そのアイオロスの二重の態度の理由を正確に理解していたが、アイオロスに完璧な友人として扱われる度に胸がちりちりと痛み落ち着かない気分も味わっていた。サガは、アイオロスが普通に隣の席に座るだけでも気分が高揚したし、日課の異なる彼と別れる度に、膨らんだ気持ちが訳も無く萎れる。アイオロスの存在によって気分の浮き沈みが起こり、一秒でも長く彼の側に居たいと思うのだ。それを、人前では隠さなければならないと、承知はしている。やり過ごさなければならない衝動だと納得はしている。

しかし、辛い。

けれど、その辛さの欠片もアイオロスの態度からは感じられない。アイオロスの素振りは二人の持つ秘め事を隠すにはまさに非の無いもので、サガにとっても安堵のものであるのに違いないのに、心が晴れない。二人きりで会えるのは、朝と晩のほんの数分だけ。それを三日も過ごした頃には、シュラに対する面目の無さから断らなければならないと思っていたアイオロスの提案に異を唱える意気地が砕けた。サガは胸の衷で何遍もシュラに詫びを繰り返しながら、アイオロスを受け入れた。まだ慣れたとは言い難い、それでも待ちに待った逢瀬だった。

――起きているか。

アイオロスの指がサガの頬をそっと撫でた。

――何時。

――六時を少し回ったところだ。

サガは、ほうっ、ため息をついた。

――お前はまだ寝てろ。体におかしな所はないな。

アイオロスの声が耳元で響き、サガは感じた熱を堪えて頷く。

――午後に、迎えに来る。

土曜の午後には交響楽団の練習がある。それに迎えに来るとアイオロスは言っているのだ。

迎えになど来てくれなくてもいい。それまで一緒に居てくれればいいのだ、とはサガは言えなかった。

長い時間を共に過ごしたはずなのに、サガの気分は晴れていなかった。話したいと思っていた事が、何一つ話せないで、体の熱だけ奪われたのだ。目蓋を閉じれば、薄明るかった部屋は夜の世界にまた戻る。

それなら、今晩こそはきちんとアイオロスと話をしなければ。心を決めると、急にサガの体から緊張が抜け、意識はすうっと微睡みの淵に滑り込んだ。そして、つるりと落下するような感覚の後、ぱちん、と音が立つようにサガは覚醒した。窓から微かに下級生達の明るい笑い声が響く。陽はすっかり天頂に座していた。寝台の袖机の上の時計を探るともう直ぐ正午になる。これは寝過ごしたと慌てて浴室に向かい身支度を済ませた時、丁度部屋の扉がノックされた。アイオロスかもしれない、それに違いないと感じ一気に苦しくなった胸を宥めて扉を引くと、そこにはクイーンズベリ交響楽団のヴィオラ奏者のアンドリュー・シーファが立っていた。

――――ロスに頼まれたんだ。まだ寝ているようなら起こして、昼ご飯一緒に食べてオケに行けって。

アンドリューの言葉がサガの胸に寂しく落ちた。

――――ありがとう。丁度これから行こうと思っていた。

笑顔を見せてサガはアンドリューを伴って階下に行き、軽食を取った。薄いトーストは少々焼き過ぎで硬くラスクのようだったが、サガは自分が味を分っているか定かではなかった。やがて時間になり二人は席を立ち、音楽棟に向かって連れ立って歩いた。午まで明るかった空に白く綿のような雲が広がり弱々しい光が木の葉に落ち、時折靴の下で弾ける軽い音が落ち葉の存在を主張した。

――――あのさ、ロス、今凄く忙しいんだよ。

突然サガの耳をアンドリューの控えめな声が打った。はっとして視線を動かすとアンドリューが申し訳なさそうな顔をして小さな笑みを浮かべていた。

――――ホントは言うなって言われたんだけど……。来週、アイオロスはLNAT(The National Admissions Test for Law)の試験があるんだよ。法学部に行きたい学生はみんな九月から十一月までに受けなきゃいけないだろ？　で、今最後の追い込みっていうか……あの、ほら、僕ロスに数学見てもらってるだろ？　それで、暫くは忙しいから面倒見れないって言われてそれで知っている、という事なんだけど……。

喉が詰まっていくような触感を、サガは微笑む事でやり過ごし、柔らかく礼を言った。アンドリューが一層慌てた様子を見せたので、サガは唇の笑みを深くして、そういえば、と第五学年のミロ・フェアファックスが発案したという新入生歓迎合宿の話に触先を向けた。アンドリューの安堵の表情とは反対に、サガの胸の中には小さな冷たい石の塊が残った。

十曜の練習は二ヶ月先に迫った定期公演のヴァイオリン・コンチェルトを通しで弾き、その他のメイン・プログラムの注意点を洗い出して終わった。全体がまとまってきて迫力が出てきたと、顧問のブラウン教授は満足の顔を見せ、下級生も嬉しそうだった。サガは練習後身の回りの片付けを済ませてしまうと、挨拶をして去っていく団員に穏やかに言葉を返しながらアイオロスを待っていた。アイオロスはコントラバスの後輩と何やら話し込んでいる。と、アイオロスの視線が上がり、サガの瞳を捕らえた。

――先に帰っていてくれ。

ふっと沸き起こった内心の衝動を胸の辺りで塞き止めて、サガは、それじゃあ、と言って先にホールを出た友人の後を追った。

日が落ちるにつれて暗くなっていった空は、寮生達が夕食の席を立ち始める時分には秋の星座を掻き消して雨粒を落とし始めた。下級生用の談話室からは、明日のクリケットを心配する声が廊下にまで賑わしく響いている。サガはゆったりと階段を上り、軋む扉を押して自室に入ると深く息を吐いて応接用のソファに腰を下ろした。まだアイオロスと関係を修復してから一週間だ。焦っても仕方が無い。特別な関係だという事は分かっている。ただ、どういう事でその特別性を計ればいいのか判然としない。サガが心の中に新たに手にした物差しにはまだ目盛りがない。のっぺりとした儚い定規をサガは持て余していた。

カーテンの隙間から覗く窓ガラスは漆黒で、居間の古時計は既に一時間も前に日付が変わった事を示していた。サガは手にしていた楽譜をティーテーブルに置き低く流していた音楽を止めた。と、そこに、風の音に紛れてしまいそうなノックの音が、二度、部屋に響いた。

――Good evening!

開いた扉と壁の間からするりと大きな影が部屋に滑り込み、サガの体を抱え込んだ。つんと冷えた空気がサガの鼻先に漂い、アイオロスの短くはない口付けの間に霧散した。

――ロス、こんな時間まで……図書室に居たのかい？

――ああ、切がつかなくてな。ったく、ボロの暖房機が壊れて冷蔵庫だった。

――そんな！　風邪でもひいたら……。

囲われた腕の中でもがいてアイオロスの冷たい頬や髪の毛に触ってサガは狼狽した声を上げた。

――ロス……この部屋で勉強をするのでは駄目なのかい？この部屋は広いし、暖房設備もしっかりしている……もしかしたら、私だって何か君の役に立てるかもしれない……。キッチンがあるから、温かいものを飲むことだって出来るし、何か簡単なものも摘める。こんな遅くまで飲まず食わずで、寒い所でやらなくても……。

それ程高さの変わらないところにあるウルフ・アイズをひたと見詰めてサガは言葉を並べたが、アイオロスの瞳からは甘い色が徐々に消え、サガの声も尻すぼみになっていった。

――お前だってそうして大学きめただろう。この時期に机に噛り付くのはみんな同じだ。

――それは……承知している。違うんだ。ただ、私は、少しでも君の役に立ちたいんだよ。

いつＬＮＡＴを受けるのか、Ａレベル試験の教科は何にするのか、級友同士が知っている事も、昨年からつい先頃までアイオロスの時間はサガの中では空白で、何も知らないのだ。アイオロスが何処の大学を目指しているのかすら知らない。既にオックスフォードに席が決まっているサガは、幾度か友人たちに現在の気楽な立場を揶揄されている。アイオロスが自分を好

いていてくれているのは知っているが、自分が無遠慮に根掘り葉掘り彼の未来図を探るような真似をしても許されるのか、霧の中を手探り歩く心持ちになる。

――サガ。

と、アイオロスに呼ばれ、サガは気を張り詰めてアイオロスの次の言葉を待った。

――お前は俺の事を信じていればいいんだ。

あまりにも厳かに言い切られ、サガが呆けていると、アイオロスは大きく肉厚の手でサガの銀色の髪の天辺を、ポンポン、と叩いた。

――シャワー、借りるぞ。

アイオロスはさっと部屋を横切って浴室のドアの向こうに消えた。この時間では、水音が階下にどれ程響くだろうか、とサガが十日前のデジー・ギネスの訪問の事を考えていると、五分程の時間でアイオロスは居間に戻って来た。

――どうした。まだ譜読みしたいのか。

ティーテーブルに伏せられているチャイコフスキーの楽譜をちらりと眺めてアイオロスは言った。

――いや。その、手持ち無沙汰だったから……。

言ってから、しまった、と思ったが遅かった。サガは特大の笑みを浮かべたアイオロスに手を引かれて寝室に向かって歩かされた。寝具に寝かされ、覆いかぶさってくるアイオロスの首に腕を回せば言葉よりも口付けを交わしたくなる。存分に互いの唇を味わった後、ナイトガウンの合わせの隙間からアイオロスの手が滑り込んで夜着のボタンを調子良く外していく。このままではまた何も聞けずに終わってしまう。サガは懸命に火照りを躱しながらアイオロスに尋ねた。

――ロス、訊いてもいいだろうか？　君は、その……何処の大学に行くつもりなんだろう……。

すると、サガの衣服を剥ぎ取っていたアイオロスの手がピタリと止まり、やがてさもうんざりしたような声が闇に響いた。

――何処って、あのド田舎の大学に行くしかねえだろ。お前が勝手にほいほい決めてきちまったんだから。

瞬間、サガは胸の中が光で撃たれたような衝撃を感じた。重ねられた唇に、言葉にならない安堵と歓喜を練り返すと、アイオロスは微かに笑ったようだった。

――お前は俺の事を信じていればいいんだ。

アイオロスの言葉が、強くサガの胸の中で響いた。

NOVEMBER

窓越しに見える木々は例年よりも早く色づいているようだった。朝の冷え込みが厳しくなって、新入生の中にはベッドで愚図愚図している間に朝食を逃してしまう者がちらほらと出始めている。特にウェールズから来たコリン・ハードウィクが酷い。十一月になってからもう四度も朝食を取らずに授業に出て

いる。今週またそんな事をしたら、寮母のミセス・ベルリッジにお小言を言ってもらわなければならない。

――今年の新入生は少し自立心に欠けるんじゃないか。

ここスミス・ハウスの寮長を務めるアンドリュー・シーファは、湿気の篭った言葉をつらつら数学のノートの上に零しながら、ひたすらに数式を睨みつけ嘯いた。

――朝食を取らない癖が付いてしまうと健康にも学業にも支障が出るから、同室の子にも朝は誘って貰えるよう声を掛けた方がいいかもしれないね。

サガはアルカイックな微笑みを浮かべたまま、アンドリューのノートの脇に湯気の立つカップを置いた。カツン、とウォルナットとボーンチャイナの肌があたって軽い音がした。時刻は夕刻、曜日は水曜。場所は、首席室での光景だった。ありがとう、という一言ともにカップソーサーを左手に、カップの取っ手を右手の人差し指に絡めてアンドリューは熱いダージリンを喉から胸へと流し込んだ。自然と深い息が吐き出された。

――少し休憩してからにするかい。それとも、今一緒にやってみようか。

サガはぐにゃりと落ちたアンドリューの両肩を見てやんわり訊いた。

――休憩するよ。折角紅茶も淹れてもらったし。

――それなら、ビスケットもどう。アンガスがファンの子に頂いたもののお裾分けなのだけれど。

――やった！　甘いものならなんでもいいよ！

どっさりとソファに凭れて呻いたアンドリューに笑顔を向けて、サガはキッチン奥のパントリーから丸い缶に入ったビスケットを幾つか多めに皿に取り分けた。と、丁度その時、部屋の扉がノックされた。足を進めて扉を引くと、第四学年のクリス・スコットが少しおどおどとした様子で立っていた。用向きを柔らかく尋ねると、宿題を見て欲しいとの事。サガはにっこりしてクリスを部屋の中に通した。そしてまた夕食の間際、ノックと共に部屋のドアが開きデジー・ギネスが顔を覗かせた。

――サガ、夕食の後、予約は何人だ？

――二人だよ。フランス語のレポートと地学の課題についてアドバイスが欲しいって。下級六学年と第五学年だから、それほど時間はかからないと思うのだけれど。

――それなら、俺は九時からだ。ミルは読んでるよな。

――うん。一応。

――よし。じゃあ、九時にな。

やって来た時と同じように、勢いよくバッと頭は引っ込み、扉は閉まった。

十月の終わりからこちら、どうも訪問者が多い。皆課題などの具合を見てくれというもので、疎かに扱える事ではなく、生真面目にサガ自身も勉強をやりなおしてみたり、教え方をあれこれと思案してみたりでなにかと忙しない。が、趣味の音楽や願い出て受講させてもらっている講義を受けるだけの日々が過ぎるより余程張りがある。本心では、アイオロスの役にこそこうしてたちたいものだと思っていても、感謝の言葉を述べても

らったり、はっと理解の喜色を浮かべる学友達はサガの存在をクイーンズベリへしっかりと繋ぎ止めてくれる。有難い。

サガの日常は、このチューターの真似事と十二月の演奏会の為の時間に塗りつぶされるようになっていた。最近は夕食の時間を過ぎて食堂に駆け込んでくるアイオロスの為に、アンドリューと一緒に三人半分の食事を確保する事にも慣れた。向かいの席に腰掛け、飲み込むように食事を平らげてまた寮の図書室に逆戻りするアイオロスの背中を見送るのも、彼が自分と同じ大学を目指しそれに向けて最大限の努力を払ってくれていると知った今、気持ちを強く持とうと自分を励ます事が出来る。

――アイツが、汚ねぇ手書きのビラ配ってたんだぜ。

夕食後、丁度二人の下級生の面倒を見終わった頃やって来たデジー・ギネスが、呆れたように言った。彼の持参したレポートの穴埋めを仕合った後の事だ。近頃は気軽に下級生も立ち寄ってくれて嬉しく思う、と言ったサガへの返答だった。

――火、木、土のオケの時間帯と、土・日の午前以外ウェルカム。苦手な教科の面倒見ますって書いてあったけな。

――え。

サガは楽しんでいたオレンジペコの香りをソーサーに戻し、デスと呼べと言い張るデジー・ギネスの灰色の瞳を見つめた。

――なんだ。知らなかったのか。長いこと一人にしてると下らない事を思いあぐねて厄介だと言っていたぞ。学問なんてアイツにとっては趣味も一緒だから、そいつで人様の役に立てれば徹夜してでも嬉しい奴だとも言っていたな。

サガは紅茶のカップに視線を落とした。本当は、少しだけ心もとなかったのだ。アイオロスが図書室に篭りきり、というのはもちろんだが、下級生や同級生からも、首席として少し距離を置かれてしまった気がしていた。寮長のアンドリューなどは役目柄下級生と接する機会も多く、またその人柄で既に下級生たちみなに親しまれている。監督生のシュラとて恐られつつも十分寮生の人意を掴んでいる。しかし、自分は、クイーンズベリという社会の中で最上の特権を得る身であるが故に、またしても見えない線によって緩やかな温度で遠ざけられてしまうのではないか、そんな不安があったのだ、五年前のように。と、デジー・ギネスの言葉で目覚した。どれ程善意を持ち、正しいと教え込まれた礼儀で相手に接しても、それらの「品格」と呼ばれるものが周囲より突出してしまえば、サガは社会の異質でしかなく、体から膿が出るように排斥されてしまう。それは善悪によって判断されるものではなく、正常な集団の自己防衛本能の一端でしかない。それを、サガは身に沁みて理解していた。

――そうか。

とサガがぼんやり一言こぼすと、デスは顔を覗き込んできた。

――なんだ、怒っているのか。

――そんな、怒ってなどいないよ。

――じゃあ、アイツには俺が言ったって事は言うなよ。

――言わないよ。

クロテッド・クリームとオレンジのジャムをたっぷり載せたスコーンを二つ平らげたデジー・ギネスは去った。サガは茶器

をキッチンに運ぶと、簡単にそれらを洗い水きり場に立てかけた。几帳面に進む時計の針の音ががらんとした部屋に響いていた。明日は誰が訪ねてくるのだったか。サガはピンで壁に留めたカレンダーを覗き込み、顔を曇らせた。十一月は、アイオロスの誕生日がある。

何か、彼の喜ぶものを準備出来たらいいのだけれど。

何度思案しても、これぞ、というものが思い浮かばず、サガはなにかに追いかけられるような心地になっていた。一日に二度、親密なキスをして、週に二度、同じ寝台で眠る。そうしても、何を贈れば彼の綺麗な笑顔が見れるか自信が無いというのは、情けない。

日毎に気温が下がる十一月が半ばを過ぎても、サガはこれと思う解答を見つけられないでいた。また、アイオロスもまるで自分の誕生日など忘れてしまっているような様子だ。実際、それどころではないのかもしれない。十二月に入れば直ぐに、どこの大学より先駆けてケンブリッジ、オックスフォードの面接が始まる。面接でAレベルの結果次第で入学可とされなければ、アイオロスとサガが同じ街で学べる機会は早くも霧散してしまう。名の知れた大学に行くことが学問の意義ではない。しかし、三年間、またアイオロスの側で未来を歩けるかもしれないという夢は、サガにとって簡単に諦めるなど出来ないものだった。不純な理由だと千も承知で、サガはそれが叶うならなんでもしたいと思うのだ。

冷たくなった風を受けながらグランド・スクールの中庭に面した回廊を歩いていると、突然呼びかける声があった。

――サガ！

驚いて辺りを探すと、立ち入り禁止の芝の上を大股に横切ってくるアイオロスの姿が目に飛び込んできた。

――サガ、今度の日曜日、お前、暇か。

駆け出した心臓の拍を悟られないように、サガは詰めた息をゆっくりもどしつつ答えた。

――夕方に物理を教えて欲しいと言われているけれど、それまでなら特に予定はないよ。

――それなら、ちょっとロンドンまで用事を頼まれてくれないか。

思ってもみなかった言葉に、瞳で、なぜ、と問いかけると、アイオロスは制服のズボンの尻ポケットからクシャクシャになった紙を取り出してサガの手に握らせた。

――お袋に頼んであるからそれをこっちまで持って来て欲しいのと、ここに書いてある酒を買ってきてくれ。

買い物を頼まれるのは構わない。しかし、広げた紙に書かれたリストを見て、サガは目を丸くした。

――金は、今夜にでも部屋に持っていく。余ったらお前の好きな酒を買ってきてもいいぞ。荷物持ちはもう一人、アフロが一緒に行ってくれるから。

それじゃあ、頼む。と、一方的に頼み事を済ませたアイオロスはさっと次の授業に向かって姿を消した。寒さなど何も感じていない様だった。サガは、仕方なく手渡されたメモを失くさ

ないように慎重にベストのポケットに仕舞い込んだ。顔を上げて中庭を見れば、灰色を混ぜたような緑の芝を固く縮こまった潅木がぐるりと囲んでいる。

今週の日曜、どうせクイーンズベリに居てもアイオロスと共には居られないのだから、彼の頼まれ事をしにロンドンに行くのも悪くない。ついでに薬器も最後の調整をしてもらってこよう。それに、もしかしたら何かアイオロスにプレゼント出来るような品を店々の窓ガラスで見掛けるかもしれない。アイオロスの頼み事を承知するのに、幾つもの理由を数え上げてしまう自分の真意を思ってサガは些か辟易した。つまり、そうせずには居られないほど落胆しているのだ。使いを頼まれるのではなく、一緒に出かけたかった、と。

アイオロスに指定された日曜は、十一月最後の日曜だった。まず最初に薬器の調整を済ませ、サガとアンガス・ジェファーソンはリストにあるアルコールを購入した。購入先はどうやらアイオロスの馴染みの酒屋のようで、アイオロスがサガに持たせたスポーツバックに、慣れた手つきで店主が酒瓶を詰め込んでくれた。

最後に向かったのがアイオロスの実家で、二人を待っていたのは十曜の朝市で買い込まれた形も味も様々のパイだった。

――――パインター弦薬器工房に先に行っていてよかった。これを抱えてロンドンを歩くのは無理だ。

同行者のアンガス・ジェファーソンが呆れた口調で呟いた。

――――でも、こんなに沢山のパイやアルコールを、どうしようというんだろう。

――――そりゃ、今晩宴会やるんじゃないんですか。

さも当然の事だと言うように言われて、サガは僅かに狼狽えた。明日の月曜には通常どおりの授業があるのだし、あと三日もしたら十二月だ。十二月になれば面接があるではないか。感じた事をそのまま口にしてみると、アンガスは不思議そうな顔をして言った。

――――だからやるんじゃないですか。

そういうものだろうか。自分の常識を疑わなくてはならない不安が、サガの胸にどっと押し寄せた。

ずっしりとした荷物を持ってサガ達がロンドンより東南に下った田園風景の広がるクイーンズベリに戻ると、首席室には既に馴染みの同級生が集まって荷の到着を今か今かと待っていた。居間の家具は全て脇に寄せられ中央にはクリケットを観戦する時に持ち出されるテントやフォルドチェアが並び、暖炉の薪は勢いよく燃えている。あまりの部屋の変貌ぶりにサガが言葉を失くしていると、パイの詰まった紙袋をデジー・ギネスがさっさと奪って小さなキッチンに消えた。キッチンからは、何かを刻んだり煮込んだりする音が聞こえてきている。

――――いつまでも呆けているな。さっさと座れ。

声にハッとすると、アイオロスがいつのまにか隣に立っていた。折り畳みの椅子に座らされ、回ってきた紙コップを握ると、アンドリューがそこに黒ビールを注ぎ、荷運びの労をねぎらう

言葉をかけた。暖めなおされたパイがピクニックテーブルに並び、部屋に居るもの全てにアルコールの入った紙コップが行き渡った。一同は手にした紙コップを高々と上げてアイオロスの名前を口にし、一気にアルコールを飲み干した。

――凄いね。サガがこんなことを企画するなんてびっくりしたよ。おまけにお酒までこんなに買ってくるなんて。

二杯目のアルコールやパイに手を伸ばす喧騒の合間を縫って、サガの隣に座ったアンドリューがアルコールで赤く染まった顔でサガに言った。

ああ、そうか。これはアイオロスの誕生パーティーか。

サガは、漸く見えてきたこの状況にやっと人心地が付いた。それにしても、自分をこの騒ぎの首謀者に仕立て上げたアイオロスの意図は何なのだろうか。問い質してみたくても主賓のアイオロスはあちらでこちらでと同級生と酒を酌み交わしあっている。

――今月の初めにはミロの誕生パーティーもここでやったし、もうここは宴会場でいいんだよな。

すっかり出来上がったデジー・ギネスが、金色の箔文字で『CASA D'AMBRA』と印刷されたラベルを持つワインを右手に掲げてサガに近付き、左手で運んでいた銀の皿をサガに差し出した。皿の上にはピンクグレープフルーツとアボガド、海老をカクテルソースで和えたものが盛られている。

――そんな事を言って……君も来月には面接だろうに。

――だから飲むんだろう。

――……そういうものなのかい。

――そういうもんだ。

デジー・ギネスの自信たっぷりの返事に、サガは途端にまた居心地の悪さを感じた。級友と会話する時、時折サガは自分が異国の地に逗留する異邦人のような心もとなさを感じるのだ。

時間が経つにつれ、一人欠け、二人欠けして減っていった客のうち、中には酔い潰れてそのまま床で寝転がるものも現れ始めた。薪を足したり、毛布を出したりとしていたサガも、二時を過ぎた頃からソファでうとうとしてしまっていた。が、やがて遠くから低く聞こえる会話の気配に意識が浮えた。

――じゃあデスとは面接日は違うのか。

――ああ。

――一泊するのか。

――いや。すぐに帰る。

――本番があるからか。

――ああ。

――真面目だな。

――手を抜く事しか考えられないのか、お前は。

――効率的にやることしか考えられないんだ。そう渋い顔をするな。今度はこっちの飲んでみろよ。ほら、いい酒なんだから、もう少し旨そうにして飲めよ。

――何時に奴等を起こすんだ。

――六時半過ぎでいいだろう。

――一時間は仮眠をするぞ。

――じゃあ、あと二杯だ。ほら、激励の一献だ。

――それならお前も飲んでおけ。

アイオロスとシュラの声だった。目を開けて二人の会話に交じろうか、一瞬サガは迷ったが、考え直した。アイオロスの、どこか人をからかう調子を含んだ声が、柔らかく絨毯に吸い込まれ対するシュラの声は、ぶっきら棒だが、いつもの重く冴え冴えとした鋭利さは無い。二人の会話は律儀に互いの間を行ったり来たりしていた。それが、無性に微笑ましく思えて、サガは目蓋を閉じたまま小さく笑った。

――おい、こいつ寝たまま笑ったぞ。

――覗き込むな。寝かせておけ。

――寝たまま笑うようなやつだとは知らなかった。

――……猫とて眠りながら笑うことはある。

――お前、猫なんか飼っているのか。

――俺のじゃない。母親のだ。

暖炉の薪が一度爆ぜた。二人の会話は潮が引くように遠くなり、やがてサガはまた浅い眠りについた。

DECEMBER

吐く息が白い。朝は八時近くにようやく空が明るくなり、それから八時間もすればまた夜が始まる。一日の三分の二は夜になる、と言ってもいいだろう。さすがにまだ雪は降らないものの、ロンドンの街中は既に綿やスプレーで作った雪が所狭しとショーウィンドーを飾っていた。頭上には雪の結晶や星を象った電飾が灯り、耳には様々なクリスマス・キャロルが届く。ローマ帝国時代にまでその存在を遡れるテムズ川に産声を上げた大都市は今、宗教と言う大樹に寄生する商業という蔦木に埋め尽くされている。サガが知っているクリスマスは、もっと静かで厳かなものなのだが、道に溢れる祭りの熱気を宿した人々の姿を見るのも楽しく、呑られて心が浮き立つ。

十二月の最初の週にオックスフォードでの面接を終えたアイオロスに、サガは土曜の夕方からロンドンに出かけ、アイオロスの実家に一泊してから日曜の晩にまたクイーンズベリに戻る片道二時間弱の旅行を提案された。最初は本番まで残り一週間のこの時期に暢気にロンドンまで遊びに出る事に抵抗を覚えていたが、面接が終わったのだから、というアイオロスの強固な主張に流される形で合意した。面接が終わったとて、Aレベル試験も他大学の面接も残っているのだから、どんな特別な理由になるのか考えると甚だ心もとない屁理屈であるのだが。

チャリング・クロス・ロードを上り Curzon Cinema で「Le Grand Bleu」というフランス映画を見た。館内が暗くなって直ぐに手を握られたり肩を抱かれたり、時にそれ以上の行為にまで及んでしまったので、サガは映画制作者に申し訳なく思うほど、内容を把握出来なかった。ただ、そんな事をしていたのが自分たちだけではなかったようなので、それは救い

だ。寮で取る夕食よりも遅い時間に中華街で食事を取ると、アイオロスはまだ実家に戻るつもりはないようで、ソーホー地区のクリスマス用ではないネオンの灯された路地に迷うことなく突き進んでいく。

――路地から伸びる手には注意しろ。まあ、まだそんな時間じゃないけどな。

顔を正面に向けたままアイオロスの発した警戒に、サガはなるほどと思った。大通りを外れてから、アイオロスはずっと自分に車道側を歩かせていたからだ。

――何処に行くんだい。

――おもしろい所。

アイオロスの体から立ち上る気配は、警戒と緊張を含んで僅かに攻撃的だが琥珀色の瞳は、楽しそうにキラキラ輝いていた。ああこれは、どう訊いてもまともに応えては貰えまい。サガは観念して時折アイオロスのその生き生きとした琥珀色の瞳を覗きながら黙って付き従った。すると、明らかに道の雰囲気がおかしな具合になってきた。路上には割れた瓶の欠片やなんだか知らない糊のようなものが張り付き、煙草の吸殻や生ゴミが転がっている。路上に立つ人間は皆草臥れた電信柱のようで生気が無いか、数人で固まってひそひそ話をしている。嫌な感じだ、そう思ったとき、突然アイオロスが立ち止まった。十メートル程先で、複数の男性が何か諍いをしているように見えた。

――側を離れるなよ。

低く言った後、アイオロスは直ぐにまた歩き始めた。一歩前進する毎に、揉めている男たちの姿が大きくなり、サガの心臓は伸縮のスピードを速めた。一団は全部で五人。うち一人が服装などからして厄介な事に巻き込まれ脅されているようだった。精一杯の虚勢を張っているようだが、本気を出していない集団の前で、その虚勢が何処まで保てるか、危うい。

アイオロスは明らかに無視を決め込んで集団の横を通り過ぎた。十歩も遠ざかった時、後ろからか細い悲鳴のような「やめてくださいよ」という声と、耳障りな幾つもの笑い声が響いた。

――……ロス！

見過ごしには出来ないと、不快と緊張で固くなった胸からサガは声を発した。

――黙ってろ。

――そんな！

――いいから。

アイオロスの足は徐々に速くなっていた。サガはくるりと振り返って戻ろうとしたが、腕をがっしりと捉えられ、そのまま狭い路地からそこそこ人出のある通りに連れ出された。電灯と店々の電飾の明るさに一瞬目を細める。

――いいか、今から十分しても俺が戻ってこなかったら、直ぐにこの通りの左端にあるパブに入って警察を呼べ。公衆電話は壊れてる可能性が高いからそこまで歩いた方が速い。走るな。それから、戻って来ようとするな。

突き刺すような瞳で口早に言われ、サガは咄嗟に方向を変えたアイオロスの腕を掴んだ。

――君一人で行くより私も一緒に行った方がいい！

――馬鹿を言うな。自分の苗字を考えてモノを言え。いいか、絶対に首を突っ込むな。９９９に電話する時も、身元は適当な事を言っておけ。

明るい通りに押し戻されるような形で一人残されたサガは、懐中時計を取り出し針を睨んだ。アイオロスの広い背が薄暗い路地に消えてからまだ二分、一分半、二分。何の音も異変も感じられない。三分。戻った場所では既にあの男性は解放されていて、誰もいないかもしれない。三分三十八秒。アイオロスという第三者の存在に、意気が削げて何事もなく終わるかもしれない。四分三十二秒。けれど、もし、彼等がこの暗闇や人数を頼みに真っ当な感覚を取り戻してくれなかったら？　刺激する事を恐れて数を正確に見れなかったが、四人または五人いたと思われる。その人数をアイオロスが一人で相手に出来るわけが無い。

サガは、もはや時計を見ずに目の前のＭＯＤＥＬという看板を掲げた店に飛び込んで警察に連絡を取ってくれるよう頼んだ。そして、来た道を早足に進み、途中転がっていた襤褸切れと骨組みだけの雨傘を手に拾い上げた。もし、相手が凶器を持っていたら、アイオロスも自分も丸腰なのだ。それに、長い得物はフェンシングの心得のあるサガの気持ちを幾分落ち着かせた。しかり、その選択は正しかった。サガが到着した時、まさにアイオロスは二人の男を相手に立ち回りを演じていたのだ。サガは傘の柄で一人の胸椎を鋭く突いた。息の詰まる音がして、男は路面に蹲った。アイオロスの方はどうだとサガが振り向けば、アイオロスは男の首を絞めていた。サガの背筋が凍った。男の体がぐにゃりと地面に崩れた。

――ロスッ！

――殺してないから。警察は。

――呼んだけれど。

――どこで。

――目の前の、ＭＯＤＥＬという店だった。

アイオロスは音を立てて吹き出した。

――本当に呼んでるかどうか、怪しいかな。サガ、今度はちゃんと教えたバブに行って警察と救急車。薬を使ってラリってる奴が絡んで来たので乱闘になった。うち一人が刃物を持っていて怪我人二名。お前の名前はエドワード・エインズワースとでも名乗っとけ。うちのジジイのだ。それから、うちにも電話。親父とお袋二名必ず呼べ。親父たちは場所が分らないだろうから、電話を借りるバブの住所を言ってお前が訳を話してくれ。とにかくすぐに来いと言え。うちからならとばせば十五分で着くだろう。

サガに鳩尾を突かれて呻いている男を、男の着ているジャケットの袖で後ろ手に縛りながら、アイオロスはテキパキと言った。サガが手を貸そうと伸ばした腕を見て、アイオロスは始めて苛立った声を出した。

――サガ！　急いでいるんだ。早く行け。

サガはアイオロスの剣幕に圧された。バブに飛び込み電話を

借りると、その話の内容を耳にした客が直ぐに数人、現場に向かってくれた。アイオロスの実家の方は、弁護士であるアイオロスの父、ジョージ・レナード・エインズワースが電話口に出、そのあとは電光石火で処理が進んだ。アイオロスが十五分と言ったところを、十分ほどでエインズワース夫妻は到着し、サガはアイオロスの居る現場に戻る事無く夫人と共にサザークに戻された。サガは十一月に誕生日を迎えたアイオロスと違い未成年だ。クイーンズベリという学校を代表する首席という立場、オックスフォードに進学が決定している未来、シュローズベリ伯爵の嫡男としての名誉、それらに付随する責任は重い。

小一時間も経った頃、サザークの小さなアパートの電話のベルが鳴り、サガとロザリー・エインズワースがハッとして互いを一瞬見詰め合った。それはジョージ・エインズワースからだったのだが、アイオロスが腕に二十針縫う怪我を負ったとサガは知らされた。

あの時、負傷者一名と言ったのは、アイオロスも含んでの事だったのか。

アイオロスの両親に対する申し訳なさと、自らの不甲斐なさを思ってサガの胸は引き千切られるような痛みに襲われた。夫人からアイオロスの部屋で休むように言われたが、眠れる訳もなく、血の気が引いて冷たくなった指を握り締めて一晩を過ごした。日曜は未明から雨が降り出し、朝の九時過ぎには霙に変わった。

午を少し回った頃に、アイオロスとその父であるジョージ・エインズワースは帰宅した。真っ直ぐにジョージ・エインズワースの前に進み、サガが今回の出来事に対して深く詫びると、その事で少し話があると言われ、アイオロスをリビングに残してサガは書斎に連れられた。

書斎の扉をジョージ・エインズワースが閉め、サガが椅子を勧められた時、突然激しい声と何かを打つような音が居間から響いた。サガの体は凍りついた。振り返って扉を凝視するサガに、ジョージ・エインズワースの穏やかな声が響いた。

――驚かせて申し訳ないが、うちはこういう家でね。母親に叱られるのも殴られるのも子供の仕事みたいなものだ。気にしないでやってくれたまえ。それより……

ジョージ・エインズワースの話を、サガは奇妙に研ぎ澄まされた感覚を持って聞いた。居間での物音、シャーベット状になった道路を車が通り過ぎる音、ジョージ・エインズワースの静かな声、全てがはっきりとサガの耳を打っていた。深々と降る雪の音さえ聞こえるようだった。

そして、話の内容はこうだ。アイオロスが今回揉め事を起こした男たちは、以前リーズの街でクイーンズベリの学生を恐喝していた人物と同一と見られ、ロンドンに流れ着くまでにも複数の犯罪に関わり、ドラッグの使用を繰り返していると思われる。被害に遭っていた男性はアイオロスが現場に到着した時逃げ出し、証言が取れていないが、財布に身分証明が在ったので捜索中。そこでアイオロス本人が男たちと問題を起こしたわけではなく、あくまでも仲裁に入った結果と証明できれば刑事事

件にはならず、民事で事が済みそうだという事。

——そして、ここからが一番肝要な話なのだが、

と、ジョージ・エインズワースはサガの硬く蒼白な顔を見て言葉を続けた。

——現場に居たのはアイオロス・エインズワース一人だけだったという事にさせて欲しい。

サガの奥歯が無意識に軋んだ。

——それは、父の、シュローズベリ伯爵からの申し出でしょうか。

——いや。違う。申し訳ないが、君のご実家への連絡はまだ様子を見させてもらっている。これは、クイーンズベリ側の意向だ。と言っても、この事を知っているのはまだ寮監のベネット氏のみだが……。氏と昨夜、今朝と二回、電話で話をした。事件の起こった場所、君の学校での、そしてチェトウィンド卿というタイトルを持つ立場、様々な事を考慮に入れて、今回の事はアイオロス・エインズワース一人が遭遇した事にするのが、クイーンズベリにも、君の実家にも、また君自身の未来にももっとも影響の無い最善の手だという結論に達した。

——アイオロス一人を犠牲にしてですか。

——犠牲ではない。彼はもう法的に成人している。あの時間にあの界隈を徘徊する事も、パブで酒を飲み買いする事も許されている。また、窮地に立った人間に加勢した事は非難される事では無い。問題は、チェトウィンド卿、君の方なんだよ。現行の法では、この国は十六になれば喫煙が許され、十八になれば許可という飲酒も、パブで食事をするのであればそれも十六から可能。両親が同意であれば、五歳からの飲酒が合法だ。だから君の今回の行動が法に触れる事は何も無い。だが、マスコミの目に触れる可能性はある。その事を理解して貰いたい。もし君が、うちの愚息に負い目を感じているのなら、それは無用に願いたい。学生の身でありながらあいう場所に足を運んだ事は遺憾だが、行動そのものは評価できる。幸い本人が第一に希望する面接は終了しているし、検査の結果もシロだった。表彰状一枚もらう事はあるかもしれないが、それ以下のダメージを受ける事もない。

——それが一番、学校内部で揉めずに済むから、という事ですね。

厳しい表情をして発せられたサガの言葉に、ジョージ・エインズワースは大きく息を吐いた。

——学校としての意志、というよりうちの息子の意志だよ。今回の事で、君も息子に責任を感じる所があるのだろうが、息子にもそれはある。責任の在り所を考えれば、彼は成人で君はまだ未成年だ。彼は君をあんな場所に連れて行くべきでは無かった。同学年という事で実感するのは難しいと思うが、「見つかれば」痛い目を見るのは未成年の方だ。あれはそういった事を十分弁えていると考えていたんだが……羽目を外したくなる年代でもあるんだろう。ベネット氏は事の真相を全てご存知だが、息子が今言った内容で妥協出来ないか話し合ってそう落着した、というのが正しい。

サガは言葉を失った。と、背後でドアをノックする音がした。ジョージ・エインズワースが入室の許可を出すと直ぐに扉は開き、アイオロスの声が部屋に流れた。

――親父、そろそろ出発しないと予定してた時間に寮に戻れなくなるんだけど。

――お前は今晩は泊まりだ。あちらで熱を出して迷惑を掛ける訳にもいかん。さっさと着替えろ。

熱、という言葉にサガはハッとした。振り向けば、アイオロスが昨日着ていたシャツは汚れてよれていた。そして、左腕のたくし上げられた袖が染められたように赤黒い。吐き気を覚えてサガは自分の胸元に手をやった。真っ白な包帯、吊られた左腕。自分は、宝だと言えるほど大切な人の体を傷つけた。そう自覚すると、目の前が真っ暗になり、言葉にならない衝撃に襲われた。

サガとアイオロスがクイーンズベリに戻ったのは月曜の丁度昼食の時間だった。付き添ったジョージ・エインズワースはハウス・マスターのベネットの事務室に残った。

二人だけで寮の食堂に向かい、好奇の視線を受けて立ち、スミス寮に在籍するクイーンズベリ交響楽団員にあまりにも申し訳ない告知を済ませた。

左下腕に縫合二十針。全治一ヶ月。

今週末の演奏会には、ドクターストップがかかった。

シュラの怒気は凄まじかった。そして、アイオロスが本番に乗れなくなってしまった事に慌てふためきながらも瞳に失望を表す団員達の眼差しが、サガの胸を何度も刺した。あの時アイオロスに見過ごしに出来ないなにと自分が言わなかったなら……一緒に戻っていたら……。考えても取り返しが付かないと理解していながらそれでも、サガの体に蔓延った呵責の念は膨れ上がるばかりだった。

――お前のせいじゃない。はっきり言って、お前が素直にこっちの指示に従ってくれて良かったよ。あそこでどんな跳ね返りをしてくれるか、内心冷や冷やしてたからな。お前の行動は、あの状況じゃあベストだった。時間を置いて戻って来てくれたのも助かったし、パブに残ってうちの親を待っててくれたのも上出来だ。これで俺じゃなくてお前に怪我なんかされてみろ、俺は二度とクイーンズベリの敷地を跨げなかったぞ。コントラバスのトップの代役は探せても、コンマス兼ソリストの代役は探せないだろう？

食事がずっと喉を通らないサガを心配して、首席室に居座りを決め込んだアイオロスの言葉に、サガは悲痛な面持ちで反論した。

――せめて、ちゃんと団員には話したい。あの場には私も居たんだ。君一人の責任じゃないし、むしろ責められるべきは私の方だ。

――だから、お前のせいじゃ無いって言ってるだろう？いい加減、ちゃんと飯を食ってくれ。でないと本番まで持たないぞ。

――だったら、君もあんなわざと反感を買うような事を言うのは止めてくれ。演奏せずにお酒が飲めるとか……そうやって君一人で注意を引き付けて、君と同じ目に寮を出て、君と一緒に帰ってきた私に掛かるはずの猜疑の目を逸らすような事はしないでくれ。

――そんな事してないだろう？　俺は素直に自分の本音を述べているだけだ。

――ロス！

サガが声を高めた丁度その時、首席室の扉がノックされた。お客さんだ、とアイオロスは顎をしゃくりサガは立ち上がった。背後でアイオロスが長々と来客用のソファーに足を上げて体を伸ばした気配を感じ、サガはアイオロスがこれで話は終わりだと態度で示していると察した。溜め息を押し殺して扉を開けた。

――済みません、こちらにアイオロス先輩がいらしていると思って。

何かを固く決心しているようなカミュ・バーロウが立っていた。サガは、カミュの透き通った、しかし重い眼差しを見て、彼が何故アイオロスを探しているか、分ったような気がした。そして、サガの予想は違っていなかった。

カミュは、ロンドンでアイオロスが遭遇した男たちの正体――それは、一年前カミュ自身が被害者となった事件の加害者だ――を察し、アイオロスを問い詰めた。カミュの身に降り掛かった悪夢のような出来事を知らないアイオロスは、カミュの追及をいつものようにのらりくらりとかわし続けていたが、カミュの執拗さと、カミュ自身が決して他言すまいと隠し通した一件を臭わせた事で態度を変えた。アイオロスはカミュの言葉の端からほぼ一瞬でカミュとあの男たちの間に何事かあった事、それが、去年の三月であった事を理解したようだった。そして、更に、カミュが先月、ロンドンで彼等を見ながら学校側になんの報告もしなかった事でアイオロスが十分に警戒できなかったのではないか、そう心情を吐露した時、アイオロスの瞳の色は変化した。

アイオロスは、己の非力を自覚する者に限りなくやさしい。

サガは、アイオロスの隣でカミュ・バーロウの姿を見つめながら、身に切り込んでくるような切なさを味わった。カミュの精一杯の虚勢、抱えていた恐怖が払拭されたと知った時に見せた無防備な安堵の表情、そして、頬に血を上らせながらアイオロスの欠場に対して無念の想いを淡々言葉にした生気の戻った顔、アイオロスはその全てを受け取り、小さく笑んで赤毛の下級生の頭を撫でた。

このやさしい人に、自分は守られる存在なのだ。それなら、自分は彼を、守る存在でもありたい。サガはカミュを見送るとアイオロスに一つの決意を告げた。

――オーケストラの団員にだけは、きちんと事実を話しておきたい。

アイオロスはじっとサガのベリドットの双眸を見詰め、仰々しい溜め息を吐いて見せた。

――上級第六学年にだけ、というならいい。

と一言。そして、言ったからと言って特に何が変わる訳じゃないと思うがね、とも付け足した。

実際、翌日の火曜の練習の後、サガが意を決して告げた真相への反応は、苦笑とともに流されてしまった。

――そんなの、わざわざ言われなくても、っていうか……。

――アイオロスの奴が一緒に居たのにお前の名前が出たら、それこそこいつ、何やってんだってってもんだろう。

――コントラバスの下級生には悪いけど、怪我したのがアイツで良かったよ。もしロード・パーフェクトに何かあったらはっきり言って本番どころじゃねぇし。

――新学期そうそう家に押しかけて「お嬢さんを下さい」紛いの事やっといて、三ヶ月で傷物にしたら、俺たちがあんまり格好悪すぎるだろう。

――お前だけは自分の立場ってもんをちゃんと弁えててくれて助かるわ。

――ついでにこんなアホな奴とはこの際縁切って、ノーマルな世界に戻って来いよ。な、サガ。

――とにかく、もう余計な事は考えないで、本番に集中しようよ、ね。乗れないものはもうしょうがないんだし。

予期していた展開と激しく何かが違う目の前の現実に、サガが呆然としていると、番人よろしくサガの後ろに立って事の成り行きを見守っていたアイオロスが苦りきった声で呟いた。

――だから言っただろう。何をどう言ったって、悪者にされるのは俺なんだよ。

悪者にしている、のでは無いと思う、と、緊張の抜けた頭の中でサガは一人呟いた。恐らく、これも、アイオロスが「労働無しに酒が飲める」と鼻歌を歌ってみせるのと同じ類の表現手段なのだ。サガは自分一人が大事にいたわられて解散してしまった現況に居心地の悪さを感じ、寮への帰り道、同伴者のアンドリュー・シーファに素直にその心情を訴えた。

――え、それは違うよ。別にサガを特別扱いにしてる訳じゃないよ。こういうのは、ほら、クイーンズベリに入って以来サガが築き上げて来た、人徳ってやつだよ。

――……そういうものだろうか。

――そういうもんだって。やっぱりさ、普段から自分にやさしくしてくれる人の方が大事だし好きになるもんでしょ、人間って。でさ、やっぱりそういう好き嫌いの感情にジャッジって左右されるのも人間じゃない。

――お前がどんだけ俺の事が嫌いか良く分った。心置きなく嫌われてやるからその口潰させろ！

ぎゃっと叫んで身を避けたアンドリューはそのまま駆け出し、その背中に向かってアイオロスが夕食の席取りを命ずる。片手を上げて了解のサインを送ったアンドリューの背中を見送り、サガは溜め息をついた。

――なんだ。まだ納得してないのか。

――納得、というか……こんな事は自己満足だって分っているのにね。

サガの隣で、アイオロスが自由のきく腕を上げてぽりぽりと頭をかいた。

――サガ、

――何。

――頭が痒い。洗ってくれ。

サガは一瞬、アイオロスが急に何を言い出したのか、と目を丸くして彼の横顔をじっとみた。

――左を濡らさないように片手で済ませるのは面倒なんだよ。

顰め面をして少し口を尖らせたアイオロスを見て、サガは事件以来、漸く胸に空気が入ったように感じた。

本番当日の朝は、今年一番の冷え込みだった。

――サガ、俺は先に行って設営の面倒見るが、お前は直前までこの部屋に居ろ。外はかなり冷えてるから指の防寒完璧にな。この分じゃホールが暖まるのも時間がかかる。

小さな身震いをして暖炉の火で手を温めながら、アイオロスは言った。既に一度外に出ていたのか、鼻の頭が僅かに赤い。

――緊張してるのか？

――そんな事ないよ。大丈夫。

――そうか。終わったら酒を沢山飲ませてやるからな。

――そんな、君じゃあるまいし。

本当は、アイオロスと一緒に舞台に上がって有終の美を飾りたかった。悔いても仕方ないと頭で分っていても、感情というものは一筋縄ではいかない。サガは小さな苦笑を漏らした。すると、アイオロスが音を立ててサガの唇にキスをした。

――シオンの雷食らわないよう、シャッキっとしろよ。

失敗は出来ない。良いものにしよう。団員達に数え切れないくらい迷惑を掛けたのだから、精一杯努めよう。サガは何度も深呼吸をして自分に言い聞かせた。

アンドリュー・シーファと共にスミス寮を出てコンサートホールに向う。うわっ、寒い、と首を竦めたアンドリューは亀のように首を短くしたまま一言、緊張するなぁ、と呟いた。途中でロウ寮のエイミー・フォードとも合流し、観客の入りやホールが早く暖まらないと管は辛いというような話をして歩く。吐き出された呼気が、重くじんわりと鼻や口元にまとわりつきながら冷気に溶け込んだ。

正面入り口から重い扉を押してホールに入ると二階席に出る。サガは一緒だった二人と分かれて二階席へ滑り込んだ。観客が存在しないホールは巨大な鍾乳洞のようだ。まだコートを脱ぐには少し勇気のいる温度の建物の中で、下級生たちは首にマフラーを巻いたまま舞台の上を駆け回り、赤い上張りの張られた観客席の間を縫って機材を運ぶ。ホールの外でも受付付用の机や椅子の設営、パンフレットの準備、案内用のポスター貼りなど様々な事に上級生からの指示が飛んでいた。ふと最下級生だった時の自分の本番の様子を思い起こし、そのこそばゆさにサガの唇の端は僅かに角度を上げた。あの時は、何から何までアイオロスに駄目出しをされて、結局出来たばかりの受付

ブースに座らされ、次の指示を仰ぎに来る団員たちへの伝言係のような事をするはめになった。

懐かしい記憶が微かにサガに過ぎさを運んだ。今日が終われば、全て、今日の事も思い出になってしまうからだ。

ゆっくりと頭をめぐらせて、サガは先に来ている筈のアイオロスの声や姿を探した。

――先輩、ソリストの控え室、準備出来ているので、そっちに荷物とか運んで下さい。多分部屋も暖まってます。

ビデオカメラを設置する為にやって来た下級第六学年のサイモン達に声を掛けられ、サガは階下を眺めていた視線を引き上げた。懐中時計を探り、ステージ・リハーサルまでまだ少し時間があるのを確認する。

音を出しておこう。

アイオロスの姿を探す事に見切りを付けたサガは、声を掛けてくれたサイモン等に礼を言って楽器に手を掛けた。とその時、ざわり、と嫌な感じでホールの空気が動いた。振り返ると、舞台左袖に人が集まっている。観客席で音響の確認をしていたシュラのもとにカミュ・バーロウの赤い頭が見えた。つい今しがたまで、張り詰めた明るい緊張に満たされていたホールに、黒々とした空気が染み出してきているような、そんな不気味な印象を覚える。サガは、楽器を肩に掛けると、最上級生達が集まり始めている舞台袖に急いだ。

――命には別状はないんだよな。

――意識はしっかりしているし、外傷もないそうだ。ただ、首をやられたらしい。

――それで……今日は無理か。

サガが舞台袖に到着すると、同級生達はみな眉間に皺を寄せ声を抑えて言葉を交わしていた。管のセクション・リーダー、エイミー・フォードがサガの姿に気付き事の次第を説明した。クイーンズベリ交響楽団の顧問であり本番の指揮者であるブラウン教授が自動車事故で病院に搬送され、今日の板に乗る事は不可能、と。

一瞬胸の裏で湧いた小さな喜びの泉に、サガは瞬時に強固な蓋をした。本公演が延期されればアイオロスと一緒の舞台が可能になるかもしれないなど、何を考えているのだと激しく自身を戒めた。

――コンマスとしては、どうだ。来年に延期するか。

――いや。延期は厳しい。来年になれば誰がしかの面接に重なったり、重ならなくても上級第八学年全員のスケジュールを合わせる事は難しいだろう。

サガは全ての動揺を押さえ込んでフォードに応えた。

――そりゃ、まあそうだけどな……。じゃあ、いっその事、みんなの受験が終わった卒業間近に仕切りなおすか。

――それも無理だよ。新年になったら来年の曲を選出してその練習を始めなければ次の演奏会が間に合わない。そして、半年も先にこの緊張とレベルを維持するのは不可能だろう。上級第八学年の団員にこれ以上脇目を振る余裕はないと思うからね。

言いながら、サガはどんどんと自分の身が凍りついていくような痛みを感じた。本番の指揮者が存在せず、当日になって代わりの指揮者を用意するなど到底無理だ。指揮者が居なくてはこの百人近い楽器を一つにまとめ上げ、あまつさえソリストとオーケストラの掛け合いである協奏曲など……弾くことは出来ても、遠方より足を運んで頂いている父兄やＯＢ達に聞かせられる音楽にはならないだろう。今日、演奏会が出来なければ、つまりそれは、第一一五期団員にとって最後の演奏会は永久に中止という事だ。厳しい表情で沈黙したままじっと床を見詰めているシュラの表情から、サガは彼が自分と同じ結論を得ていると確信した。断腸の思いだった。

――当日になって代振り探すのは不可能でも、アイオロスならなんとかいけるんじゃないかな……。

腰の引けた声に、サガははっとした。斜向かいで、アンドリュー・シーファがおずおずと右手を半分上げて上目遣いに周囲を探っていた。

――エインズワースは学生だ。

依然として床を見詰めたままのシュラ・コーツが短く言葉を発した。

――でも、僕たち、実はブラウン教授の指揮よりロスの指揮で曲を弾いた回数の方が多いだろ。

アンドリューの言葉に上級第六学年の面々は互いの顔を探り出し始め、緊張の空気が緩んだ。中途半端な期待感が彼等の体から立ち上がる。

サガは、アンドリューの提案に一瞬鳥肌が立ったものの、膨んだ希望めいた空気をどう収束させるかを素早く考えた。確かに、学生指揮であるアイオロスの指揮で団は練習を積み上げた。練習の回数は本番指揮者とのそれより多いだろう。団員達はアイオロスの指揮を知っている。だが、アイオロスは本番で指揮棒を振った経験は一度も無いのだ。その覚悟もなかった者を、いきなり当日になって舞台に立たせ、全ての責任を任せるような真似は出来ない。指揮者の責任は、一楽器奏者のそれとは全く次元が違う。サガが慎重に言葉を選んで口を開こうとした時、僅かに早く別の声が被さった。

――回数の問題じゃない。忘れたのか。エインズワースは怪我人だ。使い物にならない。

――でも、指揮なんて片手で十分だろ。

チェロののショーン・ギルバートが勇気ある言葉を返した。

――腕一本でオーケストラとソリストと同時に振れるか頭を使って考えろ。

シュラはギルバートの反論を叩き落した。成り行きを見守っていたブラウン教授のアシスタント、ロアルド教諭が団員を慰めるように声を出した。

――それじゃあ、君たち、今日の演奏会は中止、という事で処理を始めてもいいね。今から大至急で連絡を回していけば、無駄足を踏む人を少しでも減らすことが出来るだろうし。

行き詰るような沈黙の中、ファゴットのトニー・マクファーレンがふと顔を上げ首を伸びしたり回したりした。

――そういえば、アイツ、居ないけど、どうしたんだ。
――あ、ちょっと前に、一服って出て行って……。
シュラのこめかみが、アンドリューの返答で痙攣したことを、サガは見逃さなかった。何かフォローをしなければ、と思ったが、うまい言葉が見つからない。
――いつだ。
シュラの短い問いに、アンドリューの肩がびくりと跳ねた。腕の時計を確認して、アンドリューは言った。
――十八分前、です。
――……ミスター・ロアルド、中止の件は少し待って下さい。エインズワースの意見を参考にして最後の決断をしたいと思います。
押し返せない威圧感がシュラ・コーツの周りで膨れ上がった。団員はぎょっとしてシュラを見た。シュラは、一見淡々と見える表情で、当日キャンセルによって発生する混乱や、学生指揮者のアイオロス・エインズワースによって本番を乗り切る事のメリット・デメリットを数え上げ、決を採る準備を整えにかかった。それを聞きながら、団員はそれぞれの意志を固め始める。と、その時、
――おい、お前等、何集まってんの。
団員が突然のアイオロスの声にぎょっとするやいなや、更なる強烈な一打が団員の背骨のみならずホールの空気までも振るわせた。
もはや、多数決で解を見る必要などなかった。第一二五期団長、シュラ・コーツの大音声が、アイオロスを代役の指揮者とする旨を高らかに宣言したのだ。
急遽始まったアイオロスを指揮者として演台に立たせる手筈は、ステージ・リハーサルを終え、団員が昼食を取る段になってやっと目処がついた。その任に当たった学生はそれだけでもう一つの本番の山を越えたような心境だ。まず、アイオロスの実家に連絡を取り、アイオロスの父、ジョージ・エインズワースの燕尾服一式を持参してもらうよう頼み込む事から始まり、
――親父のはきつくて着れんぞ。
と嘯いたアイオロスに、衣装調達係に任命されたアンソニー・スミスがくわりと目を見開いて、
――今、各ハウス・マスターにも伝令飛ばしてます。届き次第、片端から試着して下さい。
と切り返し、
――ステ・リハ中に着せ替え人形する暇は無いだろう。
とまたアイオロスがぼやき返す。
降り番の学生と不慣れな新人生を走り回らせて掻き集められた衣装は、昼食の時間を削ってアイオロスの長身にあてられた。スミス寮のハウス・マスターであるベネットから借り受けた幅に少々余裕のある黒の背広、スラックスは側章一本の自前、イカ胸ウィングカラーのワイシャツ、白ピケの蝶タイ、白のウェストコート、白蝶貝のカフスリンク、スタットボタンはロウ寮のハウス・マスターから、ポケットチーフはサガ、サスペンダー

はヘッド・マスターのアンソニー・ヘイドからの借り物という大層な出来上がりだ。

――先輩、大丈夫です。似合ってます。

――借り物だらけで似合うもなにもあるか。

今期のコントラバスの新人生チャールズ・グレイの、手を拳に握り締めての渾身の激励に、アイオロスは鼻息で応えた。

――記念撮影始めます。急いでロビーに集合して下さい。

ソリスト、指揮者、各パート毎の衣装替え兼荷物置き部屋の並ぶ廊下を、半分掠れかかった声で叫ぶウォルト・パーシーが通り抜けた。朝から下級生に指示を出し続けて喉が潰れかかっているのだ。アイオロスは廊下にひょいと顔を出した。すると、向かいから先ほどまでアイオロスの腕にがちがちにガーゼと包帯を巻いていたシュラ・コーツにばったり出くわす。

――左手は使うなよ。

温度の無いシュラ・コーツの言葉に、

――だったら俺を引っ張り出すなよ。

と、アイオロスは切り返す。

――代替案があったか。

――いや。もしお前が学指揮なら問答無用でお前に振らせる。拍頭に死ぬ気で食らい付け、と通達宜しく。

――それぐらい自分で言え。

――俺はソリストと打ち合わせ。それに、お前が言った方がスリルが増すだろう。

苦い顔をしたシュラはそれ以上は何も言わなかった。それなので、アイオロスも黙ってロビーまで歩き、集合写真の枠に収まった。

やっぱり、ぎりぎりで間に合う、なんて事はないか。

少しだけ、ブラウン教授の帰還に期待していたアイオロスは胸の中で呟いた。各自楽器を持って舞台袖に集合、というコントラバス・パートの大御所ジョン・スチュアートの声にしたがって、収縮していた団員は一斉にばらけた。アイオロスは、自らの負傷によって、いきなりトップを任されたマーチン・スクージーに声を掛け、ついでにその他のコントラバス・パートにも「落ちたら弾く真似をして腕を動かしているように」と告げると、ソリストであるサガ・チェトウィンドの姿を探した。

サガは記念撮影の後、一度ソリスト用の控え室に戻り仕舞っていた楽器を肩に乗せ最後の調弦を行っていた。一度はミズ・エヴァンスの言葉によって宥められた心臓の鼓動が、意識するまいと思えば思う程音が高くなり皮膚を刺すように脈打っている。今、本当に大変なのはアイオロスだ。彼の負担にならないように、万全の上に万全を重ねるような演奏をしなくては、と何度も練習でのテンポを頭の中に再現する。アイオロスが、ソリストとオーケストラの調整をするのではなく、自分がアイオロスの指揮するオーケストラにピタリと合わせなくてはならない。ステージ・リハーサルで幾度かテンポがずれてひやりとした記憶が脳裏に突き刺さった。

大丈夫だ。自分が合わせられれば、その分アイオロスの負担が減る。必ず合わせなければ。そして、やり遂げなければ。

目を閉じて、血管を突き破ろうとするような血の流れを、深い呼吸で押えつけようと足掻く。大丈夫。大丈夫。大丈夫だ……。意識を集中すると、ぽっかりと口の空いた深い井戸の上に立っているような自分の姿が瞼の裏に見えた。喉を鳴らして固唾を飲み込む。と、ノックの音も無く扉が開いた。

――サガ、立ったまま寝るな。ぶっ倒れて頭を打つぞ。

アイオロスの声だった。パッと瞼を開いて声をした方を見ると、アイオロスの姿はもう目の前にまで近付いていた。

――なんだ、イギリス貴族の辞書には意気地とか根性っていう単語はないのか。

――ロス……私を怒らせようとしてもダメだよ。そういう事じゃないんだ。

君を崩壊するオーケストラの前で、無刀という刃の餌食には決してさせない。させたくない、という言葉をサガは飲み込んで、手を握りしめ、初めて自分の手に力が入らない事を知った。指が、小さく震えていたのだ。

――……サガ、余計な事を考えるな。今のお前はコンマスじゃない。ソリストだ。

――分かってる。

――分かってないだろう。

サガの拳が、暖かな乾いた指で解された。掴まれた指先は空気の中を上り、アイオロスの唇の前でピタリと止まった。

――一つの曲に、二人もコンマスは要らない。チャイコンのコンマスはアラン・モルグレンだ。ソリストがオケや指揮者の事を考える必要は無い。自分の音楽に集中しろ。

サガはアイオロスの言葉に眉根を寄せた。今から向かう先は練習ではなく本番だ。どんな言い訳もやり直しもきかない。一年かけて今日この日を皆で目指して来た。サガの脳裏に次々と団員たちの顔が浮かび上がり、一杯になった胸の重みで胃が圧し潰されそうだった。

この、掛け替えの無い友人達を、がっかりさせたくない。やって良かった、と心から思える演奏会にしたい。

望めば望む程、サガの体から血の気が引いた。強く直摯に願う程、サガの体は冷たく凍えた。ただ胸の奥だけが、ちりちりと焦げ付くように熱く痛む。

――サガ、

アイオロスの声が自分を呼んだと気付くと同時に、サガは自分の体がすっぽりとアイオロスの腕の中に収まっている事に気付いた。アイオロスの右手が、固く強張ったサガの項を優しく撫でている。

――完璧を求めるな。失敗したっていいんだよ。

アイオロスの声は穏やかで、静かだった。

――失敗を恐れて小さくまとまろうとするな。なんのために何十人もの人間で音楽をすると思っているんだ。完璧なものを目指してるんじゃない。その人数でしか出来ないものを成し遂げる事を目指しているんだ。楽しめよ。一人で背負い込もうとするのは、オケの連中に対しての侮辱だぞ。

サガは、固く目を瞑って額をアイオロスの肩に預けた。アイ

オロスの云わんとする事は理解出来る。しかし、一度収斂して石のようになってしまった体の芯には、なかなか染み込んでくれない。表皮を伝って滑り落ちるだけだ。この緊張を、アイオロスの言葉で解して彼を安心させたいと思う。けれど、竦んだ想いは深く心の奥底にくい込みきつく根を張っていた。

――なんだ。お前の最愛の男がお前のために指揮棒振ってやるって言うのに嬉しくないのか。

――……え。

不意に聞こえた不貞腐れたような声の響きと、あまりにも場違いに聞こえる単語の意味に、サガは目を丸くししてアイオロスの顔を見詰めてしまった。

――お前のために振ってやる、って言ってるんだ。ちったぁ嬉しそうな顔をしろ。

――……それは、もちろん、君と一緒に舞台に立てるのは嬉しい、嬉しいけれど……。

途中で途切れた言葉の続きを、サガは探した。一度は諦めたアイオロスと一緒に本番に立つという夢は、今まさに叶えられようとしている。長めの前髪を後ろに流したアイオロスが、燕尾服姿でサガの目の前に立ち、その腕の中に自分が居る。堂々としたアイオロスの姿に一瞬見惚れ、そのアイオロスがこんなにも近くにいる現状に突然、何処からか一気に血が体の中で沸き上がり、サガの体を温めた。

――嬉しいけど、なんだ。

囁き声と一緒に、アイオロスの顔がサガの顔に近付き、サガはこれからアイオロスとキスをするのだな、と思って思わず目を閉じた。何も見えない空間で、サガの意識は唇に集中した。長くは待たなかった。空気しか触れていなかった薄い皮膚の上に、柔らかく弾力のあるものが押し付けられる。サガは閉じていた唇を開いた。それが合図のように、アイオロスの唇はさらにサガの唇を押し退けて深く噛み合わさってきた。サガは腕をアイオロスの背中に回した。

互いの手で相手の体を探り合うように、密室のようになった互いの口の中で舌を絡み合わせてあらゆる感覚を交換し合った。濡れた口蓋も、固い歯の一本一本も、蠢く舌も、何もかも愛おしく、それ以外のものの意義が遠くなる。口を開き、歯と歯がかちん、と当たった。首を傾けてさらに深く互いを結びつける。もっと多くを求めて互いに唇を使って吸い合うと、二つの喉の奥から湿った声が何度も漏れた。やがて長く重なり合っていた唇が二つに分かれるた時、温かな蜘蛛の糸が尚も未練でその二つを繋いで揺れた。

――めったにない、最高に贅沢なデートに誘ってやる。

アイオロスの言葉に、サガは綺麗に笑って答えた。

――君と一緒なら、何処へでも。

そして、アイオロスの濡れた唇を舐め、もう一度それをゆっくりと吸った。

サガはアイオロスと共に控え室を出て舞台の袖に移動した。ソリストと指揮者は最後に舞台に上る。だから列を作って、ラ